様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　３月３１日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５９０６２７
研究課題名（和文）
　青少年の攻撃受動性からみたこころの健康づくりに関する教育保健学的研究
研究課題名（英文）
A Health Educational Research on Psychological Well-being from Aggression Susceptibility among Young People

研究代表者　　村松　常司（Muramatsu Tsuneji）
愛知教育大学・教育学部・副学長
研究者番号：７００２４０６５

研究成果の概要：
　いじめを受けやすい生徒の特徴は「内向的（低セルフエスティーム）」,「消極的で目立たない存在（低社会的スキル）」であり，セルフエスティームと社会的スキルのどちらか一方が低下すると，他の一方も低下することが分かった。また，攻撃性の高い生徒はセルフエスティーム，社会的スキル共に低いことが示された。さらに，攻撃受動性が高いほど攻撃性が強いことが示され，いじめられやすい傾向が強いほどいじめ等の攻撃行動を起こしやすいことが分かった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：社会医学
キーワード：青少年，攻撃受動性，攻撃性，社会的スキル，セルフエスティーム，いじめ，ストレス対処行動，因子分析

１．研究開始当初の背景

　文部科学省は，いじめとは自分より弱い者に対して，一方的に，身体的心理的な攻撃を継続的に加え，相手が深刻な苦痛を感じているものと定義し，全国の公立中・高等学校におけるいじめの発生件数を報告している(2005 年)。それによると，2002 年から 2003 年には中・高等学校とも減少したが，2004 年にはともに増加したとしている。これらの件数はすべてのいじめを把握しているとは言えず，今なお全国で起きているいじめは多いと考えた方がよい。特に，愛知県西尾市の中学校でのいじめ自殺事件(1999 年)や名古屋市での中学生の 5000 万円恐喝事件(2000 年)のように，いじめは特定の子どもに固定化し，集中する傾向がみられ，それが長期にわたることが多く，むしろ陰湿化し，深刻化していることは明らかである。中学生・高校生のいじめは，自殺，引きこもり，家庭内暴力，ノイローゼ，節食障害等につながり，しかも，その影響はその後の青年期にも及ぶことが示されている。

　近年，小学校でのいじめはすでに深刻化し，学年が進むにつれて多くなることが報告されている(2004 年)。これらの事を考えると早急に小・中・高等学校と連携したいじめ予防対策の策定が必要と考える。

２．研究の目的

　欧米の研究によれば，いじめられる傾向のある生徒はセルフエスティーム(肯定的な自

己評価)が低いことが認められており(1993年)，いじめを受けた生徒にはセルフエスティームの低下がみられ，その影響は持続的長期的なものであることが報告されている(1993年)。また，いじめ被害経験者は自己への肯定的な評価が低くなることが報告されている(1995年)。わが国においては，社会的スキル(良好な友達関係)が不足している子どもは仲間からの無視や拒否を経験しやすく，社会的スキルの不足はいじめや不登校に関連していることが報告されている(1988年・1993年)。

また，ストレス対処がうまくない生徒は，ストレスをためることに繋がることが報告されている(2003年)。しかし，本研究のように，いじめられた経験を調査し，攻撃受動性(いじめられやすさ)を中心として，社会的スキル，セルフエスティーム，攻撃性(攻撃性のつよさ)，生活習慣，日常ストレス，ストレス対処行動との関連を追究した総合的な研究は国内外ともにみられてない。

本研究は小・中・高校生を対象にして，１)攻撃受動性とセルフエスティームとの関連を追究する，２)攻撃受動性と社会的スキルとの関連を追究する，３)いじめを受けた児童・生徒の攻撃受動性，セルフエスティーム，社会的スキル，日常ストレス等の特徴を追究する，４)攻撃受動性と攻撃性との関連を追究する，５)教育保健学的な立場から総合的な青少年のいじめ予防教育への提案を行うことを目的としている。

３．研究の方法

（１）研究１：中学生の攻撃受動性とセルフエスティーム，社会的スキルに関する研究

研究１では，中学生611名を対象に，いじめ等の攻撃行動を他者から受けやすい子供の行動的特徴を藤田ら(2003 年)の攻撃受動性尺度(いじめられやすさを測定する尺度)を使って明らかにする。その際に，社会的スキル(良好な友達関係)及びセルフエスティーム(肯定的な自己評価)が攻撃受動性に関わりを持っている可能性が推定されるので，同時に，社会的スキル尺度(庄司，1991 年)とセルフエスティーム尺度(Rosenberg，1969年)を用いてそれぞれの関連を追究する。

（２）研究２：中学生の攻撃性とセルフエスティーム，社会的スキルとの関係

研究２では，中学生693名を対象に，嶋田ら(1998年)の攻撃性尺度(攻撃性の強さを測定する尺度)を使って，いじめ等の攻撃行動を起こしやすい子どもの特徴を明らかにする。その際にセルフエスティーム(肯定的な自己評価)と社会的スキル(良好な友達関係)が攻撃性に関わりを持っていることが推定されるので，セルフエスティーム尺度(Rosenberg，1969年)と社会的スキル尺度(庄司，1991年)を使用してその関連を追究する。また，嶋田ら(1998年)の攻撃性を４つの下位尺度別(身体的攻撃，言語的攻撃，短気，敵意別)に比較してその特徴を追究する。

（３）研究３：高校生の生活習慣とストレス対処行動及び攻撃受動性との関連

いじめを受けやすい生徒の日常の生活習慣は悪く，ストレス対処もうまくないことが予想されることから，研究３では，高校生1939名の攻撃受動性，生活習慣，ストレス対処行動を調査する。具体的には，藤田ら(2003年)の攻撃受動性尺度を使用していじめられやすさを調査し，３つの生活習慣(朝食摂取，運動状況，睡眠時間)及び宗像ら(1987 年・1993 年)のストレス対処行動(積極的対処行動９項目，消極的対処行動９項目)との関わりを追究する。

（４）研究４：高校生のセルフエスティームと社会的スキルからみた攻撃受動性

研究４では，高校生 1939 名を対象に，藤田ら(2003 年)の攻撃受動性尺度(いじめられやすさを測定する尺度)を使って，いじめ等の攻撃行動を受けやすい子どもの行動的特徴を調査し，Rosenberg(1969 年)のセルフエスティーム(肯定的な自己評価)及び庄司(1991 年)の社会的スキル(良好な友達関係)との関わりを追究する。次いで，いじめを受けた経験の程度によって比較を行い，その影響を追究する。

（５）研究５：高校生の攻撃性と社会的スキルとの関係

攻撃性の強い生徒の社会的スキルは低いことが予想されることから，研究５では，高校生 1468 名を対象にして，安藤ら(1999 年)の攻撃性尺度(攻撃性の強さを測定する尺度)と社会的スキル(庄司，1991 年)を調査し,いじめ等の攻撃行動を起こしやすい子どもの行動的特徴を明らかにする。また，安藤ら(1999年)の攻撃性を４つの下位尺度別(身体的攻撃，言語的攻撃，短気，敵意別)に比較してその特徴を追究する。

（６）研究６：高校生の攻撃受動性と攻撃性及び社会的スキルとの関係

攻撃性並びに攻撃受動性に関するそれぞれについての先行研究は数多くあるが，攻撃受動性(いじめられやすさ)と攻撃性(攻撃性の強さ)との関連を追究した研究は例がない。研究６では，高校生 1425 名を対象に，いじめ等の攻撃行動を他者から受けやすい子どもの行動的特徴及びいじめ等の攻撃行動を起こしやすい子どもの行動的特徴をそれぞれ攻撃受動性尺度(藤田ら，2003年)と攻撃性尺度(安藤ら，1999年)を使って調査し，攻撃受動性と攻撃性及び社会的スキルとの関連を追究する。

（７）研究７：小学生のセルフエスティーム，社会的スキルからみた攻撃受動性

いじめはすでに小学校でも深刻化していることが予想されることから，研究７では，

小学生 575 名を対象に，藤田ら(2003 年)の攻撃受動性尺度(いじめられやすさを測定する尺度)を使って，いじめ等の攻撃行動を他者から受けやすい子供の特徴を明らかにする。その際に，社会的スキル(良好な友達関係)及びセルフエスティーム(肯定的な自己評価)が攻撃受動性に関わりを持っていることが推定されるので，同時に社会的スキル(庄司，1991 年)及びセルフエスティーム(Rosenberg，1969 年)を調査して，深刻ないじめを受けやすい児童の背景要因を明らかにする。

４．研究成果

（１）研究１：中学生の攻撃受動性とセルフエスティーム，社会的スキルに関する研究

研究１では，中学生を対象に攻撃受動性尺度，社会的スキル尺度，セルフエスティーム尺度を用いて，いじめを受けやすい生徒の行動的特徴を調査した。攻撃受動性(いじめられやすさ)の項目では，「テストは少しでもいい点を取りたい(89.9%)」の割合が多く，以下「先生の言うことは素直に従うべきだと思う」，「学校の友人に対し，勉強では負けたくない」が続いた。これらはいずれも勉強志向・競争心の項目である。受けたいじめの中では「冷やかし，からかい(60.2%)」が多く，以下「仲間外れ」，「持ち物を隠された」，「言葉でのおどし」が続いた。

また，実際いじめを受けたことがある生徒のセルフエスティーム，社会的スキルは共に低く，攻撃受動性が高いことが示された。具体的には，いじめを受けやすい生徒の特徴は「内向的(セルフエスティーム低得点)」，「消極的で目立たない存在(社会的スキル低得点)」であると考えられる。セルフエスティームと社会的スキルの関連について，どちらか一方が低下していると，他の一方も低下するということが導き出された。

（２）研究２：中学生の攻撃性とセルフエスティーム，社会的スキルとの関係

研究２では，中学生を対象に，攻撃性尺度，セルフエスティーム尺度，社会的スキル尺度を用いて，いじめや校内暴力などの攻撃的行動を起こしやすい生徒の特徴を調査した。その結果，最も高い割合を示した攻撃性の項目は「いやな時はいやだとはっきり言う(63.5%)」であり，以下「邪魔をする人がいたら文句を言う」，「やりたいと思ったことはやりたいとはっきり言う」が続いた。攻撃性の高い生徒のセルフエスティーム，社会的スキルは共に低いことが分かった。

攻撃性全体では性差は認められなかったが，攻撃性の４つの下位尺度の身体的攻撃，短気，言語的攻撃，敵意の得点を比較した結果では，身体的攻撃と言語的攻撃は男子，短気と敵意は女子がそれぞれ高く，性差が認められた。また，セルフエスティームと社会的スキルを高めることは攻撃性を低くするために効果的ということが導き出された。しかし，セルフエスティーム，社会的スキルが高いほど言語的攻撃性が強いことも分かった。

（３）研究３：高校生の生活習慣とストレス対処行動及び攻撃受動性との関連

研究３では，高校生の攻撃受動性と生活習慣及びストレス対処行動との関連を追究した。その結果，ストレス対処行動としては「信頼できる人に相談する(79.5%)」，「困難に立ち向かい努力して立ち向かい努力する(75.6%)」が多く，高校生は結構うまくストレス対処していることが窺えた。また，生活習慣が好ましい者ほど積極的対処行動が多いが，好ましくない者ほど消極的対処行動が多く，攻撃受動性が強くなり，いじめられやすい傾向にあることが示された。良い生活習慣が身についていなければストレス対処もうまく行かず，結果として攻撃受動性を高める結果につながることが示唆された。

（４）研究４：高校生のセルフエスティームと社会的スキルからみた攻撃受動性

研究４では，高校生の受けたいじめの程度を調査するとともに，攻撃受動性とセルフエスティーム及び社会的スキルとの関連を追究した。その結果，攻撃受動性項目の経験割合は「テストでは少しでもいい点を取りたい(77.3%)」が多く，以下「学校の友達に対し勉強では負けたくない」，「先生の言うことは素直に従うべきだと思う」等の勉強志向・競争心の項目が続いた。また，男子では，強いいじめを受けた群の方が攻撃受動性 19 項目中 16 項目において，女子では，攻撃受動性 19 項目中 11 項目において有意に高く，受けたいじめの影響が大きいことが示された。セルフエスティームが高いほど社会的スキルが高く，セルフエスティーム及び社会的スキルが低いほど攻撃受動性が高いことが分かった。

（５）研究５：高校生の攻撃性と社会的スキルとの関係

研究５では，高校生の攻撃性と社会的スキルとの関連を追究した。その結果，最も高い割合を示した攻撃性の項目は「いらいらしていると，すぐ顔に出る(47.9%)」で，以下「かっとなって，ものを壊したくなることがある」，「なぐられたら，なぐり返すと思う」が続いた。高校生の攻撃性全体からは性差はみられなかったが，攻撃性の４つの下位尺度の得点を比較してみると，身体的攻撃と言語的攻撃においては男子の方が高く，短気と敵意においては女子の方が高く，性差が明確にみられることが分かった。また，攻撃性が高いほど社会的スキルが低く，逆に攻撃性が低いほど社会的スキルが高いことが分かった。

（６）研究６：高校生の攻撃受動性と攻撃性及び社会的スキルとの関係

研究６では，高校生を対象に，攻撃受動性と攻撃性及び社会的スキルとの関連，すなわ

ち，いじめられる側といじめる側との行動的特徴の関連を追究した。その結果，攻撃受動性が高いほど攻撃性が高く，また，攻撃受動性が高いほど社会的スキルが低いことが分かった。この結果から，攻撃受動性及び攻撃性の低減を図るためには，社会的スキルを高めることが共に重要なポイントであることが示された。また，攻撃受動性から攻撃性の４つの下位尺度を比較してみると，攻撃受動性が高いほど身体的攻撃，短気及び敵意が高いことが示されたが，言語的攻撃に関しては反対の傾向が示された。従って，攻撃受動性の高い者は，語的攻撃は難しいが，それ以外の因子の攻撃性が高いことから，何らかのきっかけにより「いじめ，いじめられの関係」は容易に逆転する可能性を含んでいる。

（７）研究７：小学生のセルフエスティーム，社会的スキルからみた攻撃受動性

研究７では，小学生を対象とし，攻撃受動性，セルフエスティーム，社会的スキル並びにいじめを受けた経験の有無について調査を行った。受けたいじめの中では「冷やかしや，からかいを受けた(37.4%)」といった軽い攻撃行動が多かったが，男子では「暴力をふるわれた」や「持ち物を隠された」などの直接的な攻撃行動が多く，女子では「仲間はずれにされた」や「みんなから無視された」などの間接的な攻撃行動が多いことが分かった。また，セルフエスティームや社会的スキルはいじめられやすさに影響しており，対人関係に必要なスキルであることが分かった。次いで，社会的スキルと攻撃受動性の因子分析を行った結果，社会的スキルからは，①支援・親切，②積極的かかわり，③自己中心・意地悪，④物による支援の４因子が抽出され，攻撃受動性からは，①ネガティブ・攻撃受動，②学習・競争の２因子が抽出された。研究７からは，積極的な関わりのない内向的で，消極的な子どもや自己中心的な態度の子どもがいじめられやすいことが示された。

５．主な発表論文等

（１）〔雑誌論文〕（計６件）

１）金子恵一，伊藤康児，服部洋兒，村松常司，藤田定：高校生の攻撃受動性と攻撃性及び社会的スキルとの関係，学校保健研究，49(4)，302-312，2007

２）金子恵一，服部洋兒，村松常司：高校生の攻撃性と社会的スキルとの関係，教育医学，52(4)，234-244，2007

３）金子恵一，服部洋兒，村松常司，藤田定：高校生の生活習慣とストレス対処及び攻撃受動性について，東海学校保健研究，30(1)，11-21，2006

４）金子恵一，服部洋兒，村松常司，藤田定：高校生の攻撃受動性とセルフエスティーム，社会的スキルに関する研究，学校保健研究，48(4)，307-324，2006

５）松下加代子，村松常司：中学生の攻撃性とセルフエスティーム，社会的スキルとの関係，東海学校保健研究，30(1)，47-60，2006

６）原由梨恵，藤田定，村松常司：中学生の攻撃受動性とセルフエスティーム，社会的スキルに関する研究，学校保健研究，48(2)，158-174，2006

（２）〔学会発表〕（計６件）

１）清水康太，河尻直，石黒由美子，服部洋兒，金子恵一，村松常司：中学生の攻撃受動性と攻撃性及び社会的スキルとの関係，第 55 回日本学校保健学会総会(2008 年 11 月)，名古屋市

２）河尻直，清水康太，石黒由美子，服部洋兒，金子恵一，村松常司：中学生の攻撃受動性とストレス及びストレス対処について，第 55 回日本学校保健学会総会(2008 年 11 月)，名古屋市

３）金子恵一，服部洋兒，村松常司：高校生の攻撃受動性と攻撃性に関する研究，第 53 回日本学校保健学会総会(2006 年 11 月)，高松市

４）金子恵一，服部洋兒，村松常司：高校生の攻撃性と社会的スキルの関連，第 49 回東海学校保健学会総会(2006 年９月)，鈴鹿市

５）金子恵一，服部洋兒，村松常司：高校生のセルフエスティームと社会的スキルからみた攻撃受動性に関する研究，第 52 回日本学校保健学会総会(2005 年 10 月)，仙台市

６）金子恵一，服部洋兒，村松常司：高校生の生活習慣とストレス対処及び攻撃受動性について，第 48 回東海学校保健学会総会(2005 年９月)，名古屋市

６．研究組織

（１）研究代表者

村松　常司(Muramatsu Tsuneji)
愛知教育大学・教育学部・副学長
研究者番号：７００２４０６５

（２）研究分担者

服部　洋兒(Hattori Yoji)
愛知工業大学・経営情報科学部・教授
研究者番号：８０２０８５４５
岡田　暁宜(Okada Akinobu)
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：２０３１９３２０